

酒井麻衣子ゼミ：『多摩大学ドッチボール大会』の運営について

経営情報学部3年 濱畑 翔平

■ドッチボール大会とは

毎年6月に行われるオープンキャンパスと同時開催し、来校した高校生たちに多摩大生の元気の良さを伝えるために開催しているゼミ対抗のスポーツイベントです。今年で記念すべき第10回を迎えました。私たち酒井ゼミはマーケティング・データ分析を学ぶゼミですが、イベント運営によってマーケティングの実際を学ぶ目的で、本大会の運営事務局を担っています。在学生にも『大会を通じてゼミ内の絆はもちろん、ゼミとゼミのつながりを作ってもらっきっかけを提供する』という志を胸に取り組んでいます。

しかし日曜日の自由参加イベントであるため、参加ゼミが年々減少傾向にあることが課題です。そのため、参加ゼミ数を増やすことを今大会の大きな目標としました。

■参加ゼミを増やすためには…

私たち運営事務局が参加ゼミを増やすために考えた戦略は、『景品で釣る』（言葉は悪いですが…）です。本大会では昼休みにビンゴ大会が開催されるのですが、意外とその景品目当てで参加している学生が多いのではないかと、この仮説から、こうした戦略にいたしました。

広告や宣伝では豪華賞品を前面に押し出すと同時に、すべてのゼミにドッチボール大会に参加する価値を訴えて回りました。このゼミを回っての宣伝が一番苦労しました。担当の先生一人ひとりにアポイントメントを取り、100近いゼミに宣伝に何う日程を決めて、その日程にゼミ生を派遣するシフトを作る、という調整が本当に大変でした。

■そして大会当日

そして迎えた大会当日ですが、受付開始前にまさかのトラブルが発生しました。大会で使用するコート（アリーナ）で、フットサル部の練習試合が手違いで組まれてしまっているというのです。しかし、双方の学生責任者が話し合い、大会の開催時間を30分遅らせ、さらに練習試合は時間を短縮して行っていただくということで折り合いを付けました。

そのため、ドッチボール大会の参加者がフットサル部の試合を見ながら開会式を待つ、という異例の形になりました。さらにその後、フットサル部の方々もドッチ大会に飛び入り参加して大活躍してくれたので、結果的には良

いトラブルだったのかも知れません。

さて、「参加ゼミを増やす」という私たちの目標ですが、昨年は7チーム、今年はいくとう…8チームと、あまり変わらない数字となってしまいました。しかし1チームだけでも増えたので、目標は半分くらい達成といっても良いのではないのでしょうか。

チーム数は少なかったですが、大会は活気に溢れていました。特に盛り上がったのが最後に行われた『オールスターバトル』です。これは、各チームが代表選手を出して即席で2チーム作り対戦する、という目玉イベントです。全参加者が応援する中で迫力あり笑いあいの試合に、ギャラリーの高校生たちも身を乗り出して見てくれていました。

■後輩へのバトンタッチ

「大学生にもなってドッチボール〜？」と思う人が多いと思います。しかし、大学生だからこそ、誰でも楽しめるドッチボールを子供のように真剣に戦うことで、新しい交流や絆が生まれるのかも知れません。

さて、来年はどれくらい参加者が増えるでしょうか。第11回大会でその戦略を練るのは、現酒井ゼミ2年生の仕事です。今年は「見習い」状態で働いていた後輩たちですが、彼らはどのような戦略で、多摩大生の参加意欲を掻き立てるのでしょうか。今から楽しみです。



アリーナでの試合



運営事務局メンバー(酒井ゼミ2,3年生)

第10回 多摩大学ドッチボール大会 結果報告
2015年6月21日(日)開催
優勝 浜田ゼミ『味崎社長と七人のしもべたち』
準優勝 フットサル部
第3位 大森ゼミ3年『TEAM・森拓』

杉田文章ゼミ紹介

経営情報学部3年 奥村 亜瑞美

杉田ゼミでは主にレジャーについて様々な形を通して3年間研究しています。私は今3年生なのですが、私が2年生の時は余暇マネジメントという授業を履修して、余暇レジャーについての基本的な考え方を学び、ゼミの中でさらに先生の話聞いて理解を深めていきました。

3年生になった現在は、同じ学年で何人かグループに分かれてそれぞれ自分の興味のあるレジャーについて研究しています。私はサッカー、特にJリーグについて興味があるので、今詳しく研究しているところです。ゼミ生の雰囲気はアットホームで、先生やゼミ生がお互いに様々な意見を出し合います。先生は私たちに自由に研究をさせてくれています。実際にグループで現地取材にいった、書物やインターネットだけでは学べないことを身につけられるのはとても面白いです。研究中に、よく先生から様々なアドバイスをいただきます。私たちだけではまだ気付かなかったことを教えてください、物

の見方が広がったなと自分自身感じています。

杉田ゼミでは全学年が参加する杉田ゼミ内発表に加え、積極的に大学の発表祭に参加しています。発表の機会が多いゼミなので、私自身あまり人前に入るタイプではなかったのですが、発表に慣れていきました。今年度末の発表祭に向けて、今の研究を納得いくものにしたと思っています。



学期末にみんなで軽食を取りながら話し合いをしました！

経営情報学部3年 武田 彩

私の所属している杉田ゼミでは、余暇（レジャー）とスポーツをテーマにして研究活動を行っています。私はスポーツが好きで、色々な活動を展開していきたいという考えを持っていたため、杉田ゼミに入りました。ゼミの活動は個々で異なり、私が携わった昨年の代表的な活動例としては、多摩大学で行われたフットサル教室です。多摩大フットサル部の協力のもとで、小学校低学年を対象に多摩大学のアリーナで開催致しました。私は普段、子どもと関わる環境がないため、非常に貴重な時間を過ごすことができました。子どもが純粋にフットサルを楽しんでいる様子を見て、改めて、スポーツの良さを感じました。

こういった活動や研究を重ねていくうちに、私たちゼミ生は「より多くの人に余暇の価値を提供したい」という考えにたどり着きました。今、私の班は「日本の観光資源の再発見」というテーマを元に研究を進めています。ネットや本での情報収集だけでなく、実際に自分たちで空港や民泊などに足を運び、外国人旅行者や宿舎の方にインタビューなどの研究活動を計画しています。杉田ゼミでは学年を問わず、ゼミ内での活動報告発表があります。また、多摩大学のゼミ発表会にも毎年参加しているため、その時により良い報告ができるように活動したいと考えています。

メディア実践論の制作現場から

人と生き物のふれあいの場 ～多摩川・せせらぎ館を訪ねて～

経営情報学部3年 大貫 瑠奈

水辺のある風景はなぜ人の心を和ませるのだろう。

私にとって多摩川は、子供のころから親しんできた「水辺のある風景」だった。友達の犬を散歩させたり、散歩している人を探しに川べりに出たり、お花見に行ったり、四季折々の多摩川の景色とともに沢山の思い出がある。多摩川は私の成長をずっと見守り続けてくれた川でもあるのだ。

私が、この「メディア実践論」で企画について考えた時、真っ先に思い浮かんだのは多摩川だった。でも、多摩川で、何を、どうする！？

そういえば小学生のころに授業で出かけた施設があったな、何かイベントがあるといえば見に行っていた「せせらぎ館」・・・と記憶をたどっていくと、川に棲むいろんな生き物とのふれあいがあったり地域の人々が集う場だったりしたことに思い当たった。

そうだ、「せせらぎ館」に行こう！

正式には「ニヶ領せせらぎ館」というのだが、多摩川とともに生きる地域の人々にとってとても大事な交流の場になっている。この「せせらぎ館」を、カメラを通して見つめてみるとどんな発見があるのだろうか？うん、これで企画は決まりだ！

今年の夏は「せせらぎ館」を中心に多摩川がとても盛り上がった。7月の「多摩川せせらぎ夏万博大作戦」では河川敷にたくさんの出店が出た。小さい子供達が遊べるプール、ダンスや地元宿河原太鼓の公演などを行うステージも設置されて大賑わいだった。さらに8月5日には5年ぶりの「狛江の花火大会」が開催された。「無料の観覧席」なので残念ながら建物に遮られてナイアガラの花火などは全景を見ることはできなかったが、多摩大学OBの方の企業がスポンサーになった「スターマイン」は夜空を彩る迫力に歓声が湧き起こった。

おっと、花火を楽しんでいる場合ではない。「せせらぎ館」の取材だ。

インタビューは難しい！これは今回の実感であり、一番の反省点でもある。

もちろん、聞きたいことをある程度決めて取材に向かった。ここまでは上出来だと、思っていた。しかし、話を掘り下げて聞くというのは本当に難しい。インタビューしたボランティアの方たちは普段から小学生や外国の方に話をしていることもあって、聞きたいと思っていたことはすべて話してくださった、ように思えた。で、そこからどう掘り下げていくのか、ここが一番大事なのだが、「問い」が浮かばない。結果、話が広がらなかったというか、深まりがいま一歩だった。話を聴き取って「問い」を生み出すのがインタビューだと、教室で学んでいても、実際となると簡単ではない。

でも、今回の取材で思ったのは私の運の良さ。ロケ当日はあいにく、いまにも雨が降り出しそうな曇り空だったが、川辺で「カワセミの家族」を発見！近くにいた「おじさん」たちにインタビューもできた。そんな「おいしいハプニング」にも柔軟に対応できたのは、ロケ取材の経験のある2人の「腕のいいゼミ仲間」のサポートのおかげだった。人の助けを借りて物事に取り組む大切さを学んだことも、今回の取材の成果だった。

さあ、秋学期は編集だ。これからさらにたくさんの素材集めに力を入れなければならない。また、取材に応じてくださった「せせらぎ館」の齋藤光正さんから胸に響くメッセージをいただいた。これをどうまとめ、表現するのか、乞うご期待です！



せせらぎ館でインタビュー



多摩川せせらぎ夏万博大作戦 (7.19)

地域に住まい、地域に学ぶ ～地域学生センターの暮らしを追って～

経営情報学部4年 永野 泰寛

「永野君、学生ジャーナルは次号も君のレポートを載せよう！」

「エエッ！！そんな、また僕ですかあ」

「君の企画は通年で追っていかねばならないものだよ。しかもインタゼミでも君は多摩ニュータウンをテーマにしているんだらう。当然、継続的にレポートを載せなきゃ！」

というわけで、また書かなければならなくなった。

その企画とは、多摩大学のシェアハウス型の学生寮「地域学生センター」の学生たちの暮らしと地域活動を追うというものだ。親しい後輩の学生がその「学生寮」に住むことになったので興味を持ったことが始まりだった。きれいで立派なその「寮」に手ごるな部屋代で住むことができる。がしかし、地域貢献活動をしなければならないという条件があった。面白い！と思った。そしてこれはすばらしいと、自分が住むわけでもないのに、感動した。ということで「メディア実践論」の企画として取り組むことになった。

その続報を書くようにというのが木村先生の「すすめ」だ。(先生は「すすめ」だけ」と言っているけど、結構キツイよね、2号連続で書くのは)

現在シェアハウスには3人の学生が生活を共にしている。シェアハウスに住んでいる学生それぞれに、今どんなことを感じているのかインタビューしてみた。

「何をやるにも学生寮として扱われるので、一人ひとりの動きや考えを常に共有して、誰もがまわりに対応できるようにすることが大切だと実感していますね」

なるほど・・・、住んでみて成長したな～って思うところは？

「社会に出たとき何が大きかっていうことがわかってきて、将来やりたいビジネスとか、新しい視点を持つことができたかな。やっぱり、そういうところは成長したと思いますね」

そもそも、どうしてこのシェアハウスで生活してみようと思ったのだろうか。

「多摩大学には入ったけど、多摩地域をまったく知らない。地域に住んで、自分の肌と目で地域の課題を知ろうと思った。この活動を通して人のネットワークを広げられると思ったから・・・」

シェアハウスでの生活を通して地域へのかかわりを深めていくことへの意気込みがこもっている。さらに、「人の笑顔が好きなので、少しでもこの地域の笑顔が増やせるように努力したい」ということばが返ってきたときは、私自身も勇気づけられた。

学生たちはみんな着々と地域の活動に参加している。5月5日の端午の節句で鯉のぼりを揚げたり、子ども向けイベントでは企画段階から参加したり、聖ヶ丘団地の「ふるさと夏祭り」では「きゅうりの一本漬け」の販売をはじめ、若さを生かした「力仕事」で大いに活躍した。

40年以上前に広大な多摩丘陵を切り拓いて開発された多摩ニュータウンは今、人口減少や高齢化によって新たなステージを迎えている。「ニュータウンの再生」という、同じようなニュータウンを抱える地域共通の、いわば「日本の課題」といえる広がりを持った問題に直面している。「メディア実践論」で取り組む企画としてはとてもやりがいのあるテーマであることは間違いない。だが、いまはまだまだそこまで取材が追いついていない。これが今、私にとって一番の課題になっている。

地域で活躍する彼らのチャレンジを力にして、充実した作品にしようとして、私もまた現在奮闘中である。



ふるさと夏祭りでは司会役を (8.22)



部屋ではいつも談話風発

My Journey, My Path ～10年間の成長と挑戦、SGSへの思い～

グローバルスタディーズ学部 4年 堀 案璃

マウイで生まれのんびりした環境で育った私がこの10年間日本で生活してきた思い、そして4年間多摩大学 SGSに通い私に合う学校だと実感できた事、日本に居ながら英語で勉強できる SGS。この4年間で学んできたこと、思いを話したいと思います。

私は自由の国アメリカ、それものんびりとしたハワイのマウイ島で生まれて11年間育ちました。父と母はルールが少なく私を自由に育ててくれました。11年間マイペースで自由に生きてきた私は、日本に来て、アメリカにいた頃知らなかった常識、様々な文化やルールを学び、上下関係や時間の厳しさを理解することになり戸惑い、ついていくのに時間がかかりました。学校やアルバイト、社会での経験、関わってきた友達、先輩方、上司、親戚などが私を成長させてくれました。両親は私なりのペースで日本文化と言語を理解することをサポートしてくれ、両親が与えてくれた自由があったからこそ今の自分があります。両親とは面と向かってしっかりとコミュニケーションを取り、自分のやりたい事や思っていることを何でも話し、自分のやりたい事が少しずつ見えてきました。日本の常識は母も父もあまり重要視していないと言っているけれども、マナーや人間として大切な事を教えてくれました。母の大きなサポートと行動、父が共感してくれた想い、周り一人一人の大きな応援、これがあったから今の私があると思います。

中学から高校まで東京郊外にある学校に通いました。学校は家から片道2時間もかかる場所にあり、始めの頃は電車に乗り慣れてないので乗り間違えや迷子になったこともあり、私にとって毎日が冒険のような体験でした。6年間、片道2時間もかけて学校に行けた理由は、通っていた学校は帰国子女を受け入れてくれる学校であることと、少人数だったため一人一人の生徒をよくみてくれたからです。特に国際学級に入っていた私は先生がちゃんと向き合ってくれたので、少しずつでしたが一般のクラスに追いつけるようになり、また色々な言語が飛び交う環境でもありました。私にとってはとても居心地の良い6年間を過ごせました。多摩大学の SGS も少人数で先生がしっかりと向き合ってくれる事が中学、高校の頃と似ていたもので、とても魅かれました。また、先生方もほとんどの学生を覚えていてくださり、少人数のため先生にとっても話しかけやすい環境だと思います。

日本に来て高校までは日本語に負担を感じていたのが日本の大学に不安を感じていましたが、SGSのオープンキャンパスに参

加し、日本の大学への思いが変わりました。紹介で SGS を知り、オープンキャンパスに参加し、そのときの体験授業で英語での心理学のような授業を受け、とても分かりやすく、楽しい授業を体験することが出来ました。日本に居ながらして英語での授業を取ることが出来る SGS に魅力を感じ、ここで勉強したいという気持ちになりました。他の大学では多くの授業が少人数であることや英語であることはなかなかない環境だと思いました。少人数だということと、私が興味を持っていたホスピタリティーの勉強を英語で学ぶことは私が SGS を選ぶポイントになりました。

大学3年の秋学期にシャング(安田震一)ゼミに入り、中国史や表象文化について学びました。春休みが始まり、他のゼミの数人とマカオ大学に短期留学しました。私はマカオへの留学と聞いて、マカオはどこにあるのか?どんな所なのか?などなど…調べていくと最近発展した場所で、テレビにもよく紹介されているような所でした。カジノが有名なマカオはラスベガスを超えるような場所ですが、それだけではありません。たくさん世界遺産があり歴史を感じる事が出来ました。さらに IR のことについて勉強しました。IR(Integrated Resort) 統合型リゾートとは、ホテル、ショッピングモール、レストラン、劇場・映画館、アミューズメントパーク、スポーツ施設、温浴施設などにカジノを含んでいるリゾートになります。そこへの挑戦、考え、思い、そして成功への貴重な話しを聞くことができ、また施設への案内をしていただきました。今回の留学は香港にも行きましたが歴史、文化、言語を学びました。観光中はローカルな人で何人かは英語や日本語を話せず中国語で返してくる方もいて、中国語が話せない私は会話がスムーズに出来ず、言葉の壁を感じ、コミュニケーションを取る大変さを知りました。コミュニケーションは言葉だけではないという事も学び、どうにか通じた時にはすごく嬉しかったです。留学で日本では気づかない事をたくさん学ぶことができ、大変貴重な体験になりました。

私は今後、外国の方と関わる仕事がしたいと思っていますが、日本でもグローバル化が進んでいる現在、英語力はもちろん、様々な客観的視点が必要だと思います。SGSはそんなグローバルな思いを育てられる学校だと思います。SGSで学んだ事、色々な体験はこれから私が社会に出て生きていく中できっと役に立つと確信しています。



留学先のマカオ大学にて記念写真



留学先の香港にて記念写真

パブリックビューイング

会長 3年 福田 雅之

応援という目的の下、多摩大学で学ぶ学生同士でスポーツ観戦をしたいとの趣旨で昨年の6月に001教室にて、学生会執行部主催「パブリックビューイング 男子サッカー日本代表の試合（日本 VS ギリシャ戦）」を大画面で中継した。好評につき今年も7月2、6日に121教室にて、なでしこ JAPAN 準決勝&決勝戦でパブリックビューイングを開催した。

カナダ大会が最後のワールドカップになると澤選手は明言しており、さらに日本は前回のワールドカップ（2011年）でアメリカをPKで下しており、なでしこ JAPAN には連覇がかり注目が集まった試合でもあった。

代表選手の活躍に121教室では、歓声が上がリ昨年にも増して一体感が生まれていた。このイベント企画は急遽決定し、限られた時間の中での実施であった。準備は出来たものの認知度が低く来場者数こそ少なかったが、初対面同士でも喜びを分かち合え、会場全員が一丸となって応援し、結果こそ準優勝ではあったが、充実したパブリックビューイングを開催できたと思っている。さらに教職員や教授の方々にも参加して頂き、次回の開催への励みとなった。

パブリックビューイングの開催は2回とまだ実績は浅いが、学年の枠を超え、皆が気持ちを一緒にし、何かひとつの目的に向かう交流の場として、イベントを開催できればと思う。



なでしこ JAPAN 準決勝観戦の様子

いざという時のために

会計 2年 下野 咲子

私は中学、高校と応急救護の指導を受けてきました。テストや検定も特にはありませんでした。もちろんのこと方法などは覚えていましたが、細かい部分は教えられていなかったように感じていました。でも、この学生課主催の応急救護（8月3日）の講座を受けるまではこれで大丈夫だ、人が倒れていたら自分も助けることができる、と思っていました。

しかし、今回は周囲を確認するときの手や心臓マッサージのときの手の置き方、形、組み方など、非常に丁寧かつ細かいところまで教えていただきました。それから、何度も何度も繰り返し練習することで最初は戸惑っていた動作やわからなかった順番も覚えることができました。心肺蘇生だけでなく、傷病者の安全な動かし方や安全な体勢など様々なことを教えていただきました。AEDの操作方法や片付けかたなどはこの応急救護講座を受けて初めて知ることができました。

遠出での事故や体調不良以外にも普段の日常生活から使うことができるものもあり、いざというときにはここで教わったことをいかそうと思いました。

この時期は日差しも強いだけでなく、合宿や旅行などがあるため、このタイミングで体験や試験を受けることができ本当に良かったと感じています。

ここで学んだことを実際にいかし、困っている人がいたら助けることができるようになればと思います。学生会の一員として参加させていただいたことを嬉しく思います。

教えてくださった赤十字の皆さんには本当に感謝しています。ありがとうございました。



参加者がローテーションで心肺蘇生とAEDの練習をしている様子



心肺蘇生のテストをしているところ

芝生広場にて学生会主催イベントを開催

広報 1年 田倉 大雅

7月31日、多摩キャンパスの芝生にて、バーベキュー等のイベントを開催致しました。昨年度とても盛況に終わったのと、定着したイベントを作っていくため「今年もバーベキューのイベントを開こう」ということで開催へと踏み切りました。しかし、このイベント自体まだ開催回数が少なく、私たち一年生はよく分からないことが多かったのですが、話し合いを何度も行ったことにより無事イベントを開催できました。

今年度のイベントを行ううえで新しい試みをいくつか始めてみました。例えばプロジェクターを使いT-Studioにパソコンの画面を写しビンゴ大会の進行に使ったりなど、ユーモアのある使い方ができ、学生の反応も上々の様でした。さらに、最後に多摩大学で充実した思い出になればいいと思い、本国へ帰ってしまう留学生をイベントに呼び、修了式を行いました。留学生に話を聞く場を設けて、今回のイベントを楽しんでいるか聞いたところ、「楽しい」と嬉しい回答をいただきました。まだまだ、成長のできるイベントだと思うので、反省を生かして、さらにいいイベントとして作りあげることができればと思います。今回は学生や教職員の方々がお越しになっただけではなく、地域の方も来ていただいたので、とても意義のあるイベントを開催できたのではないかと思います。

参加して頂いた学生や教職員や地域の方々、誠にありがとうございました。よりよいイベントを学生会一同で今後も開催していきますので、ぜひお越しください。



イベント開始間もない中、多くの学生にご来場頂き、あっという間に満席になりました